

反障害通信

11. 12. 27

31号

「現実的な」－「現実的に」ということ

わたしの理論は運動のための理論です。その中で、理論的深化ということを中心としてやっています。しかし、「現実的な」ひとびとの生活に根ざした活動をしていかななくてはならない」というような提起を、受けていました。それは大前提とも言えることで、「現実的な」問題をきちんと示すということに、繰り返し自己批判的に立ち返ろうとしていました。

ですが、この「現実的な」ということばが何を意味するのか、ということを経験的に考えています。

たとえば、「障害者運動」の「個別」課題－運動を担ってきたひとたちが、民主党が政権をとる以前に、民主党政権に変わることによって、その課題－運動が「現実的に」解決されるというところで民主党に肩入れしていくということがありました。しかし、障害問題以外にも含めて、わたしは民主党政権に替わって現実的に解決されたことをあげることはできません。マニフェストにあげたことは総崩れ的情況です。

「現実的な」ということで、わたしが障害問題で一番想起するのは、イギリス障害学の「社会モデル」に対するモリスらの批判の「現実的な障害者の苦悩をとらえ返していない」ということでした。

さらに障害学で現実の市場経済をなくすことは困難だから、その枠組みでものごとを考えていこうというところで、ヘーシックインカム（「基本所得保障」と訳されています）の議論などもすすんでいます。

また、機会均等法としての差別禁止法という形で進んでいることや、権利条約の批准ということで、そのキーワードのひとつである「合理的配慮」ということを「障害者運動」が受け入れていくことにもそのことは現れています。「合理的」ということの中身として、過度な負担を求めないというところでの「現実的に」ということなのです。

さて、この「現実的に」ということばで想起できることがあります。それはマルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』の中の「共産主義というのは、僕らにとって、創出されるべき一つの状態、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは、現実の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の諸条件は今日現存する前提から生じる」（マルクス／エンゲルス著 廣松渉編訳 小林昌人補訳『新編輯集版 ドイツ・イデオロギー』岩波文庫 2002 71P 廣松編訳は二人の間のやりとりを記録しているので、もっと煩雑な文になっています。この文は校正最終稿です。）ということばです。（註1）

さて、このド・イデのテーゼはわたしは最初岩波文庫の古在訳で読み「現実の矛盾に対する闘争」という形でとらえていました。そして、これだけでは時として「何かやっ

それは問題が解決できるというような幻想にとらわれる」自己表現的自己満足の活動になるのではないかと、次のような注釈をつけていました。「現実の矛盾をどのようなこととして押さえるのか、そこでその解決の路を進んでいくために方針をだしていくことが必要になる」ということです。(註2)

これを押さえたところで、前述した「現実的な」ことを押さえ直せば、モリスらの批判には「モリスは現実的な苦悩の中身をちゃんととらえかえせず、その苦悩を医学モデル的なところに押し込んでしまっている」となります。障害学で進むベーシックインカム議論には「資本主義をマルクスが賃金奴隷制と押さえたことをとらえ返せていない。ベーシックインカムは労働者を資本家の頸城から解き放すことになり、市場経済が解体されることになる、ゆえに資本主義社会の枠組みでベーシックインカムは構造改革的革命論としてしか意味をもたない」となります。

さて、もうひとつ反差別という立場での問題があります。それは、「現実的に」というところで、ひとつの問題の「現実的」解決ということで、他の差別の問題を切り捨ててしまっているという批判です。そのことは民主党政権から、沖縄の基地の固定化ということで、社民党が連立政権から離脱したことに端的に表れています。「個別の現実的」利害をつきだしていくとき、いろいろな軋轢をうみ、分断され、結局ほとんどの問題が解決されないまま残っていくという事態になっていきます。

さきほどあげた「機会均等としての差別禁止法」は「重度」と規定される（「労働市場に参入できない」とされる）「障害者」を切り捨てる論理になっていますし、「合理的」ということの中身は、「合理的」とされることと「合理的ではない」とされることとの分断と差別を生み出します。

わたしはこれはそもそも差別というところをどうとらえるのか、「差別の構造の」ようなところまでほりさげてとらえていかないと、「あれかこれか」や「あれもこれも」式の運動におちいって行くのではないかと押さえています。

あくまで「個別・現実的」課題から入っていくことしかないことですし、そのことを忘れた運動などありえないのですが、「差別の構造」(註3)の解体を見据え、そこにつながる、「個別・現実的」課題と運動としていかななくてはならないということとして押さえ直しています。

かつての「障害者運動」は誰も排除しない、させないという基本的姿勢をもっていました。そして、「障害者の生きやすい・住みやすい街はみんなが生きやすい・住みやすい街である」というユニバーサルな性格をもっていました。その原則を「現実的な」というところで踏み外しては、運動の死をもたらします。

そのようなところから「現実的な」問題をほりさげてとらえ、総体的な根源的なところにつながる「現実的な」運動が必要なのだと思っています。

註)

1 最近読んだ本（『反資本主義宣言』）の中で、これは青年ヘーゲル派として出発したマルクス／エンゲルスがヘーゲルの絶対精神の自己展開の論理を批判する中で出てきている

ことだと押さえ得ました。そしてその本の中で指摘されているように、同じくヘーゲル批判の中から出てきたプラグマティズムと共鳴し得る論理ではないかと言い得ます。

2 マルクスの流れをくむひとたちのプラグマティズム批判もそのようなこととしてあつたはずです。

3 構造の物象化を批判したところで、関係性総体としての「構造」として押さえることが必要だと思っています。

(み)

読書メモ

原発震災—エコロジー関係の読書の間に、インターネットからダウンロードした障害学関係の論文への読書メモを挟みました。

エコロジー関係の学習はもう少し進んでいて、小出さんの本を読み、高木さんの本に戻って来ています。『反資本主義宣言』の本も挟んでいます。あまり長くなると読みづらくなるので、次回に回します。三月くらいまでにはエコロジー関係の本の学習にめどをつけて、棚上げしているフェミニズム関係の本と障害問題の学習に戻ります。廣松派のひとたちの本も手をつけたいと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 180

・ 広瀬隆『新エネルギーが世界を変える—原子力産業の終焉』NHK 出版 2011

2001年にだされた『燃料電池が世界を変える』を元に全面改稿して出された本。

エネファーム（燃料電池）、コンバインドサイクル、マイクロガスタービン、自然エネルギーについての紹介です。ただ、著者は二酸化炭素温暖化説を全面否定していて、二酸化炭素温暖化と原子力エネルギーを批判して出てきた自然エネルギーを実現の見込みがないと批判しています。尤も、著者の中で少しずつ自然エネルギーの評価は違ってきていて、『燃料電池が世界を変える』の時に書いた文と、今回書き改めた自然エネルギー評価との間にズレがあり、ズレを埋める改稿がきちんとなされていないのではとわたしはちょっと感じてしまいました。当人としては、今すぐ原発をとめるというところでの提起として、自然エネルギーは使えないというところなのでしょうが(自然埋蔵量の問題で、「この技術革命の時間の時間が残されているので、それを知って落ち着いて考えてほしい」158Pと埋蔵量には余裕があるという論も展開しています。そこで、今は代替的には使えない自然エネルギーではなくて、原発に代わるエネルギーを考えていることもあるのでしょうか)。

ともかく、エネファーム（燃料電池）、コンバインドサイクル、マイクロガスタービンについて、かなり詳しい紹介がされています。その技術革新はすごものがあると感じられます。

原発はすぐ廃止できるという著者の論攻で少なくとも新エネルギーの効率化やクリーン

化の中で、危険でクリーンでもない原発を即時廃止できるという説得には、ものすごいエネルギーを感じます。

ただ、広瀬さんは、自分はこうだという確信のようなことがあるのですが、それが思い込みみたいところで、もう少し自分の論考を自己の中で客観的・批判的にとらえ、他者とも対話していく必要があるのではと思っています。わたしごとの余談になりますが、わたし自身、自分の論考への批判をまないたに挙げる作業はしているつもりです。時として思い込みにならないか検証が必要だとの思いもあるのですが。

さて、本題に戻りこの著のいくつかの疑問点を出します。

「ソーラーパネルに使われる半導体のシリコン結晶を製造するためには、同じ一キロワット時の発電量で比較すると、石油火力の二倍の石油を消費する。発電する時に燃料を全く使わない太陽光でありながら、その前に石油を消費するのでは、そして大きな意味がないと思わないだろうか。」57P これは、意味不明です。経済学をかじっただけのわたしでも、固定資本と流動資本という概念を持ち合わせています。意味がなくなるのは、太陽光パネルがすぐ破損し、作り直さなければならないので、そのたびに石油を消費する場合です。要するに日々消費する石油の消費量と、太陽光パネルを作る石油量の大きさの比較とパネルの長持ち度の問題なはずです。

太陽光エネルギーへ、かねもうけ主義みたいな批判が書かれていたのですが、資本主義の社会でかねもうけを希求しない会社はないわけで、他の新エネルギーだって、そのような批判は当たるのではないかと思います。それだけでない理念はあるにせよ、です。自分の賛同することと批判することの一面的なとらえかたにちょっと疑問を感じました。

二酸化炭素温暖化説に対して仮説にすぎないとの批判があるのですが 168P、そもそも科学ということ総体が絶対的真理などないことで、仮説にすぎないことです。だから、それを何の意味もないウソ八百みたいな論調にはならないはずです。わたしはすでに著者の『二酸化炭素温暖化説の崩壊』でコメントしたのですが、もう少し煮詰める作業は必要だと思っています。

排熱のことをすごく問題として取りあげているのに、温暖化説自体を虚構として批判をしていることとどう繋がるのかもよく分かりません。

電気自動車の批判を、電気がどこで作られるのかを考えると、意味がないというような批判著者の批判が出ているのですが、自然エネルギーと組み合わせたら使えることです。それは別のところで書いているのですが、それが統一化されていません。

エネファーム（燃料電池）、コンバインドサイクル、マイクロガスタービン自体も最初は援助とか試験試作ということで、採算が合わない中で進められてきたこと、自然エネルギーも新しい技術革新が出てきているとちらっと紹介があるのですが、自分の思いのようなことがエネファームなどに動いていて、自然エネルギーの可能性についての論考がほとんどなされていません。

さて、また余談になります。この文を書きながら、広瀬さんは反原発のアジテーターなのだと思っています。福島原発事故以来、この機を逃さずにと、次から次にと改稿も

含めて、本を出しています。ひとつひとつの細かい詰めよりもいかに反原発の流れを作っていけるのかを主題としての思いではと、わたしは改めてとらえ返しをしています。

細かいことにこだわり、論的な厳密性を求めるわたしはアジテーターにはほど遠いのかもしれません。そんなところで文を書いているものだから、わかりにくい伝わらない文しか書けないのかもしれません。弁証法ということばの語彙は対話から来ているという指摘があります。わたしの文のわかりにくさは、あちこちで対話を積み重ねていって、それはわたしの文を追っているひとには伝わるのかもしれませんが、そんなことは皆無、だからむずかしいむずかしいという批判を受けることになります。もちろん、それ以前の表現力・文章力のなさの問題があるのでしょうか。

反原発というところで広瀬さんのアジテーションと高木さんの科学的論攷、対極的なのですね。それぞれの持ち味なのでしょうが、ただ、反差別論をやっているときちんと対話していく指向になっていくので、広瀬さんの断定的論調に違和を感じてしまうのかもしれません。ただ、運動は政治的なならざるを得ないので、アジテーションも求められるのです。ふたつのことが必要になっていくのかもしれません。

たわしの読書メモ・・ブログ 181

インターネットから「障害の社会モデル」批判に関する論攷

障害の社会モデル批判、ということ 키워ワードにしてインターネットの google で検索にかけました。かなりの論攷に出会いました。またもや、自分の不勉強を思い知り、また資料集めの基本も知らなかったと反省している次第です。

以下、簡単なメモを残し、「障害学批判」への批判の文を別稿で書く材料として残し置きます。メモ的な処になってしまっているので、他者には読めない文になっていると批判されることですが、とりあえず自家用のメモを残し、関心をもってもらえたら本文にあたってもらいたいと思っています。先にも書いたように、このメモをもとにもう少し伝わる論攷を別途書き、対話していたらと願っています。

- ・西村高宏「障害と身体社会学—障害学における<身体>の復権をめざして—」

<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/eth/OJ2-2/nishimura.htm>

ターナーがメルロポンティの現象学とフーコーのポスト構造主義との連携による「社会モデル」批判の論攷を書いています。それへの著者のコメントです。障害学には認識論的なところに踏み込んだ論攷は少なく、貴重な資料です。

しかし、そもそもなぜメルロポンティとフーコーなのか分かりません。現象学の流れのエスノメソロジーの精細な分析とフーコーの微視的(ミクロな)権力論が結びつくということが考えられます。そこで、日常の経験というところを欠落させているという「社会モデル」批判が、日常の経験に留意しているエスノメソロジーとリンクする現象学とポスト構造主義フーコーとリンクしていくのでしょうか。

それに、わたしはフーコーはそもそもポスト構造主義なのかという疑問があります。

フーコーは通時的なところでの構造を覆したポストといえるけれど、共時的なところでもポストなのかと考えています。フーコーに対して、ミクロの権力論を問題にしているけど、マクロの権力論を抜け落としているという批判が出ています。だから、共時的なところでの構造の変動ということがフーコーからは出てこないのではないかと思います。

そもそもメルロポンティが出ているのに身体論が出てきていません。そもそも「身体とはなにか」ということが、この論攷を読んでいてもとらえないのです。わたしもかつて身体論をやろうとしていたときに、「身体とは関係性の分節である」というテーゼがでてきて、そこでそれ以上の身体論への踏み込みを棚上げしてしまったのです。

この著者の論攷を読んでいると、身体の実体主義に陥っているのではないかという思いを持っています。この身体の実体主義批判は、廣松さんの身体の延長性や痛みの各私性批判の議論からも出ていたのですが、わたしの本の中でも展開していたのですが、もう一度整理したいと思っています。

- ・ 座主果林「障害の「社会モデル」 — 「社会モデル」の意義と障害者の経験の記述における限界—

<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/2535/1/AN10436699V15pp99-112.pdf>

「社会モデル」をフェミニズム障害学というところで批判したモリスへの論攷が軸になっています。

文中に「impairment の解釈」という文が出てくるのですが、わたしはこれはもっと根源的に、「価値づけられて異化した impairment」という問題ではないかと考えていました。

わたしはフェミニズムと障害の学的類似性を考えてきたのですが、そこで引用できる文が出ています。

ヒューズとパターソンの引用として「インペアメントとディスアビリティを区別することで「社会モデル」の主唱者たちは社会的抑圧としてディスアビリティを問題化することに成功したが、そのためにインペアメントは生物学的問題とされ医学モデルの下におかれ続けてきた」。このところは、インペアメントを性差、ディスアビリティをジェンダーと置き換えると、フェミニズムでのジェンダートラブルの論攷と対比出来ます。

ポスト構造主義フェミニズムでは性差ということの脱構築というところまで展開しているのですが、そのことを押さえたなら、モリスもこの論文の著者もインペアメントの脱構築というところに進んでいくことではないかと思うのですが。

- ・ 竹内良子「障害学」における「障害の社会モデル」という考え方について」

http://nanbyo-jiritsushien.net/network/report/archives/pdf/8/8_27.pdf

社会モデルと ICF の相違を展開していて、共鳴していました。

- ・ Y.SATOU 「適正技術」としての介護技術(その3)—障害のパラダイム転換」 2001

http://www.google.co.jp/search?sourceid=navclient&hl=ja&ie=UTF-8&rlz=1T4TSJH_ja_JP408&q=%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ae%e3%83%91%e3%83%a9%e3%83%8

[0%e3%82%a4%e3%83%a0%e8%bb%a2%e6%8f%9b](#)

パラダイム転換についての記述があります。ただ、ここでの転換は反転というような内容なのですが、パラダイム転換の定義がまず必要ではないかと。

- ・星加良司「本当に「社会モデル」は死んだのか？ T.シェイクスピアの社会モデル批判をめぐって」2007

<http://www.arsvi.com/2000/0709hr.htm>

「社会モデル」批判を展開している T.シェイクスピアについてのコメントです。

アイデンティティ論が出てくるのですが、アイデンティティ論はまだ生きているのかという思いを抱きました。上野千鶴子さんが『脱アイデンティティ』という本の編集をしているし、アイデンティティ論のもつ抑圧性はすでに反差別論の中では、指摘済みではと思うのですが。

- ・星加良司「「障害学」の到達点と展望—「社会モデル」の行方—」2002

<http://www.arsvi.com/2000/021116hr.htm>

差別の構造というところからとらえ返す事が必要でないかと、この論攷に書かれていないところを考えていました。

- ・後藤吉彦「身体の社会学と障害者の身体—なぜ身体を語るのか、何を身体で語るのか」2008

公立はこだて未来大学での講演のレジメ

<http://www.fun.ac.jp/~kawagoe/goto.pdf>

おもしろそうな論攷なのですが、レジメ的な文で内容がつかめません。講演録を探してみたいと思っています。

- ・石尾絵美「障害の社会モデルの理論と実践」

<http://kamome.lib.ynu.ac.jp/dspace/bitstream/10131/3136/1/3-Ishio.pdf>

「ディスアビリティがインペアメントを規定する」というような論攷が出てきます。ソシュール言語学の「言語として異化しないものは存在しない」というような論攷にリンクするのですが、これでは懐疑論になってしまいます。むしろ、インペアメントとして異化する以前の<そのもの>としかいいようのないことを押さえる、という論理になるのではないかと廣松さんの構成主義批判の論攷とリンクして考えていました。

そもそも「身体とはなにか」というところでの、身体の脱構築が必要なのではないかと思います。

この論攷を読みながら、障害学とは「生きがたさの学」ということではないかと考えていました。そこで、どうもこの論攷も「痛み」というところから生きがたさをとらえようとしているようなのですが、そもそも「痛みとは何か」ということのとらえ返しが必要で、むしろ障害学は「できないことをめぐる生きがたさ」ではないか、痛みは病としてとりあえず別におかれていたのではないかと考えていました。

とりあえず、**impairment** の脱構築は「何ができないといけないとされているのか」とい

うことを考えることから深化していけるのではないかと考えています。

- ・松波めぐみ「障害学入門・本編～「社会モデル」って何？～」2003

http://www.jca.apc.org/~hirooka/mitikusa20/miti20_3.html

「社会モデル」をわかりやすく説明しようという論攷です。

- ・松波めぐみ「障害問題を扱う人権啓発」再考—「個人—社会モデル」「社会役割」を手がかりとして—」2003

<http://www.arsvi.com/2000/030425mm.htm>

役割概念とリンクしているところは興味深く読んでいました。

なぜ、人権論なのかというところにはいつものように違和を感じていました。

- ・堀田義太郎「障害の政治経済学が提起する問題」

<http://www.eth.med.osaka-u.ac.jp/OJ4/hotta2.pdf>

現代社会を固定化したところでの分析になっていて、その固定化したところでのジレンマを問題にしています。

文化モデルの話がでてくるのですが、いわゆる障害個性論的などころでの「できること—できないことの学」というような内容になっています。

立岩さんの責任論に触れています。要するに、認識論的な論考ではなく、どちらに責任があるとするのか、という倫理の問題にしていることへの提起なのでしょう。わたしはむしろ倫理の問題にしていくことの中身は、どのような関係性を作り上げていくのかの問題だと思うのですが、そもそも立岩さんは市場経済はなくならないとしているのでどのような関係を作り上げていくのかということは何を描けるのでしょうか？

ひとつの議論としてベーシックインカム議論を出しているのですが、そもそも資本主義経済とベーシックインカムはアンチノミーにしかありません。革命は困難なのかもしれませんが、ベーシックインカムと市場経済の両立は不可能なのです。

さて、障害ビジネスが必要だとして生み出した、というような論攷がでてくるのですが、ビジネスという概念はいかにも現在社会を固定的にしかとらえていません。ビジネスの論理こそが「障害者」を抑圧する論理なのだと思うのですが。

- ・片川祥吾「障害の社会学的考察—障害学における社会モデルの再構築—」2009

http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E5%AD%A6%E6%89%B9%E5%88%A4&source=web&cd=25&ved=0CD4QFjAEOBQ&url=http%3A%2F%2Fwww.arsvi.com%2F2000%2F0903ks.doc&ei=WfytTqywOYyCmQX9z_D4Dg&usq=AFQjCNFJbVn4hPRy1bSwPyO6EYj_ijmeLA

テーマを探る観点は鋭いと感じていました。しかし論点を煮詰める問題ではいろいろ疑問を感じてしまいました。

インペアメントとディスアビリティの関係がよくわかりません。結局「インペアメントの苦痛」というところにとらわれているようなのです。

文化モデルとしての個性の一部という古い論攷—「障害をもつ」という表記にも疑問を

持ってしまいます。

I C Fの過大評価。統合としての **disabled people with impairment** 概念の提起はまさに I C F的なのですが、そもそも I C F批判が必要です。

結局「筋ジスの障害者」という著者立場から、病気と **impairment** との「区別と連関」があいまいになり、苦痛の各私性にとらわれ、**impairment** 概念のとらえかえしがなしえなかったのではと考えていました。

介助についても労働化された介助としかとらえられず、雇用の創出などというところで展開してしまっています。新しい関係の創出としての共生としての介助という観点もあると思うのですが、そういうところはありません。現在社会の枠組みだけで考えてしまっているところから来ているのだと、思っています。

出されている観点はするどいのですが、認識論的なほりさげがないところで、パラダイム転換的内容に至らないのです。実体という概念自体の批判をとおし、そのことは明らかになると思うのですが、「もつ」とか「実体」という言葉を使いつつ、関係も問題にしているのですが、関係論的なところからの認識論的整理が必要ではないかと思っています。

この論攷は自らの立場性からくる、存在—生存を賭けた思いと言うことが感じられ、それがこの論攷を生み出したと言い得ると思っています。そういう意味で共鳴しているのですが。

・荒木紀昌「障害—disability—の形成——社会がもたらす抑圧と排除」2006

<http://members.jcom.home.ne.jp/rikato/07araki.htm>

この論攷も I C Fの過大評価ととらえ違いがあると指摘せざるをえません。資本主義の俯瞰というようなところで資本主義の中における **disability** をとりあげています。フーコーの施設が持つ意味というところでの論攷をとらえ返しています。そのことにつなげて、著者は救貧院の設置が労働の強制と労働崇拜のイデオロギーをつくった、そのことが働けないものと規定される「障害者」への抑圧とつながるといふ論攷を展開しています。その展開は興味深いものがあり、わたしも共鳴していました。そして、ここでもディスアビリティがインペアメントを生み出すというような論攷が出てくるのですが、結局苦痛の経験として **impairment** は存在するという論攷になっています。そして個人主義や医療化のイデオロギーをせっかく採りあけで居るのに、個人モデルや医学モデルにとらわれているのです。ここは実体主義批判までほりさげで展開しないと結局、「**impairment** をもつ」という論理から脱け出せないということなのではないでしょうか。

前の章との関係がはっきりしないのですが、第三章がいちばんまとまった論攷になっています。さてこの著者にもこの論攷を書かせる明確な立場があります。兄が「ダウン症」と規定される「障害者」ということです。その立場があるので、羊水チェックなどで出生前診断される可能性がつよいということで、優生思想についてのこのまとまった論攷が出てきたのだらうと推測できます。この章では市野川さんの文をひいて近代的個人ということと優生思想の結びつきを展開していて、それはインペアメントが浮かび上がることもつながり、ここでは書かれていないパーソン論ともつながっていくのですが、近代的個人—近代的個我の論理まで出てきているのに、「個人—属性」という実体主義の論理への批判

にまでは至らなかったようです。

・橋本真奈美「自立生活障害者の地域生活を支えるヘルパーに求められる障害者観—ヘルパーがもつ可能性と困難・「社会モデル」と「医学モデル」—」2007

<http://www3.kumagaku.ac.jp/srs/pfd2/13-1/13-1-43.pdf>

なぜ、介助は当事者主体で進まない、進みにくいのかを主題にしています。

今の「障害者福祉」が、かつての「障害者運動」の介助の考えから切り離された高齢者の介護保険制度の介護の考えから出てきていること、そして介助の考えが医学モデル的考えにとらわれているという指摘をしています。そこでは自立ではなく、ADLとしての自律というところから抜けだせていないという指摘です。そして、かつての家族介助ということから抜けだせない状況も、相変わらず続いているという指摘をしています。

いろいろな情報を織り込んでくれていて、幅広い観点はありますが、もう少し煮詰める作業が必要ではないかと思います。たとえば、モリスの指摘を展開していても、それへの反批判との対話が十分展開されていません。

わたしは「障害者」の生きがたさは、この論攷の中で出て来る、当事者主体に転換できないところから来ているのではないかと考えています。モリスなどから **impairment** そのものからくる経験とか言う話が出ているのですが、このあたりは著者も指摘しているのですが、むしろ「社会のあり方」の問題、とりわけ国の「障害者施策」における「障害者観」が「障害者」と介助者の共生ということを妨げて、「してあげている」という介助者の意識のとらわれを作り出しているのだと。

もうひとつ、「生活モデル」ということが生態学的な観点をいれたこととして評価されていることに対して、適応主義という抑圧的な内容をもっているのではないかというような指摘もしています。このあたり、著者はかなり問題点を網羅し、かなり突っ込んだ指摘をしてくれています。

基本的なところの押さえは共鳴できるのですが、ちょっと気になることが書いてあるのでコメントしておきます。介助者はいつでもやめることができる、そこで「障害者」は生きられなくなるとの非対称性の問題を指摘しているのですが、これは労働者と資本家の関係の非対称性の問題を想起させるのですが、介助の仕事につく供給が、必要とする「障害者」の需要を超えると、非対称性は出てきません。もちろん相性とかの問題もあるのですが、このあたりの現状の介助の質・量ともにニーズをみだしていないということを現在社会の限界を固定的にとらえ、そのことを自然的なこととしてとらえてしまっているのではとわたしは考えています。

たわしの読書メモ・・ブログ 182

・シーア・コルボーン/ダイアン・ダマノスキ/ジョン・ピーターソン・マイヤーズ
『奪われし未来 増補新装版』翔泳社 2001

高木さんの本の中で紹介されていたエコロジー関係の重要本です。

翻訳本は読みづらい本が多いのですが、この本は原典が読みやすい共著になっています。コルボーンが「科学的な地盤」のデータベースを作り、環境科学と環境政策を取材してきたダマノスキが予備知識を持たないひとにも分かるような物語にしあげています。マイヤーズが環境的なところの政策に関わってきた立場で「深みを添え」た、という一風変わった協同作業の共著なのです。こういう共著もあるのかと興味深いものを感じています。

それに、分からないところと、推測できること、こういうとらえ方もできるなど、客観性をもたせた論攷は、説得性の高いことで、まさにこれが学的立場での展開だとぞくぞくすることがあります。

さて、この本を読みながらいろいろ抱いた思いは別稿で展開します。

ここでは自家用のメモを残します。ことばだけでも、興味をもってこの書を手にとってもらいたいとの思いからです。

ホルモン作用の攪乱 55P

遺伝子決定論への批判 67P

遺伝子は鍵盤、ホルモンが作曲家 72P ?

鳥類は雄が基調、ほ乳類は雌が基調 75P

科学に対する楽観主義 83P

五体満足 87P

植物が護身用に作る経口避妊薬 123P

三つの化学物質への焦点 131P

6章 食物連鎖による濃縮 PCBの旅

ヒトの生殖能力は「病理」すれすれ 188P

疑似エイズ ラットの免疫不全 248P

外見にまどわされてはならない事が必要 251P

『沈黙の春』へのコメント 253P

進化論へのコメント「進化論は、「自然淘汰」を強調するあまり、生命史の流れを一貫して支えてきた、ゆるぎない核のような保守的傾向を無視するきらいがある。」 253P

関係論、ジョン・ミューアの引用「何でもよいが、ある対象だけを拾い出してみよう。するとそれが、この宇宙の森羅万象と目には見えない無数の紐で分かちがたく結ばれていることがわかるはずである」 254P

がんばかりが注目される、むしろ内分泌ホルモンが解明されているし顕著 255P

逆U曲線 256P・常識からの乖離 正比例ではない

パッチワークキルト 257P

因果論的とらえ方による問題をとらえることの困難さ 258P268P

早熟と世代交代の早さが野生動物への影響を大きくする 259P

精子数 261P

甲状腺ホルモンによる「発達障害」 279P

条件ストレスの問題 288P

性指向 291P

考えられることを列挙していく 292P

もはや暴露していないものはない 293P・・・高木さんの放射線汚染していないものはない

懐疑的批判に対する反批判 293-4P

カーソンが見落としていたこと 298P

がん偏重主義 302P

ホルモンのメッセージは脳の形成や性分化、凶暴性、などさまざまな発達プロセスに関わる 303P

遺伝子偏重 304P

DNA の修復性とホルモンの非修復性 305P

障害をめぐる訳語 307P

3 世代にわたる調査の必要 308P

因果論的にとらえかたへの批判 309P

因果関係の特定? 310P←関係論

人類全体への影響 310P340P 個人への内自有化

方針 313P 暗くなることではない

害虫の進化 338P 関係論からのとらえ返し

IQ へのとらわれ 346P 生物学的とらわれ

滅亡だけでない「たちの悪い」??影響 349P

現代の環境汚染は地域単位から地球単位に変える 350P

人類のバランスを欠いた能力 357P

ヒトの普遍的・標準的生理ということが設定できなくなった 351P

ファストの悪魔との契約 352P・・・プロメテウスの火

己のふがいなさ 354P

CFC(フロン)と DDT 356P

合成化学物質は何千年も・・・なのに安全保障がない 357P

大気と子宮の化学環境・・・身体論と個体主義・実体主義批判 361P

知らないことがたくさんあるという知恵 363P

科学推理小説 364P

覆す証拠はまだ出ていない 364P

環境問題は厳密な立証でないうちに動き出すべき 365-6P・・・「厳密な立証」というのは因果論的とらわれ

PCB、ダイオキシンはADHD、LDなどを引き起こす 368P・・・否定性

世間並みになることはなかった 369P・・・否定性

複合作用 393P・・・花粉症、放射能・・・因果論でなく、関係論的

変態する動物への影響が大きい 403P

サークル 科学工業に低濃度汚染での検査する技術がない 408P

アメリカ研究者の結論 406P

横浜宣言 408P

EDSTAC への対象物 6 種類 411P

規制の遅さと不備（資本家たちの反撃） 412P

消費者運動 413P

スウェーデン 413P

ガイドライン 414P

逆転 414P

ナチュナル・ステップ 415P

WTO の支配が環境破壊 416P・・・そもそもグローバルイゼーションの問題、そこまでの論攷はない

疫学と内分泌攪乱の研究の違い、疫学で対応できない 419-420P

追跡調査という前向き研究の提起 420P

その間にヒトをモルモットにした暴露の大研究が進んでいる

根拠の確かな科学と予防に基づく方策の対立

地質年代のような悠長さ 421P

世界にまたがる大実験を食い止める予防原則を掲げた国際協力の必要 422P

子どもへの被害の増大 432P

進化への心配 433P

おわりに・・・この初版への化学工業界の「御用学者」たちのひどい応答

たわしの読書メモ・・・ブログ 183

・レイチェル・カーソン『沈黙の春』新潮社（新潮文庫） 1974

『奪われし未来』で何度も紹介されていたエコロジー関係の出発点的古典です。

この本や原発関係の本、エコロジー関係の本読んでみるとどうしてひとはこんなおかしなことを続けられるのかという思いが湧いてきます。合成化学薬品の散布ということは、追いかけごっこです。化学薬品資本はそれにつきることのない研究開発でもうけ続けられるということなのですが、生きる基盤から破壊し、生物の死や自分たち自身も生きること自体が危うくなっているということに、なぜ気がつかないのでしょうか？

エコロジー関係の本を読んでみると、なぜ、こんなおかしなことがと、暗くなるのですが、それでもきちんと問題を提起し、方向性を示してくれています。

「無機的な」自然から植物、動物、ひとへという道行きです一つと読んでいけます。

また、具体的な事例をたくさんあげてくれています。文学的な展開もあり、すごく読みやすい本です。

各章の構成は以下の通りです。

1. 明日のための寓話／2. 負担は耐えなければならぬ／3. 死の霊薬／4. 地表の水、地底の海／5. 土壌の世界／6. みどりの地表／7. 何のための大破壊？／8. そして、

鳥は鳴かず／9. 死の川／10. 空からの一斉爆撃／11. ボルジア家の夢をこえて／12. 人間の代価／13. 狭き窓より／14. 四人にひとり／15. 自然は逆襲する／16. 迫り来る雪崩／17. べつの道

各章ごとのメモを載せます。いつもは自家用のメモにしかになっていないのですが、今回は少しは伝わるように書きました。

1. 明日のための寓話

導入部です。詩的な文で、「沈黙の春」という本のタイトルの由来、生物が死に、春のざわめきが聞こえない「沈黙の春」ということの恐れを書いています。

2. 負担は耐えなければならぬ

全体の概略的エッセンス的章です。

いくつものこころ振るわせる文があります。長くなりますが、抜き書きしてみます。

「この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、たがいに力を及ぼしあいながら、生命の歴史を織りなしてきた。といっても、たいてい環境のほうが、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎない。だが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が、おそるべき力を手にいれて、自然を変えようとしている。」 15P・・・章の冒頭

<人間自身が作り出した悪魔が、いずれ手におえない別なものに姿を変えてしまった。

>16P・・・アルベルト・シュヴァイツァーの引用

「時をかけて—それも何年とかいう短い時間ではなく何千年という時をかけて、生命環境に適合し、そこに生命と環境の均衡ができてきた。時こそ、書くことのできない構成要素なのだ。それなのに、私たちの生きる現代からは、時そのものが消えうせてしまった。」

16P

「合衆国だけでも、毎年五百もの新薬が巷に溢れ出る。実にたいへんな数であって、その組み合わせの結果がどうなるか、何とも予測しがたい。人間や動物のからだは、毎年五百もの新しい化学薬品に何とか適合していかなければならない！ そして、私たちのからだに、動物たちのからだにどういう作用を及ぼすのか、少しもわからない化学物質ばかり・・・。」 17P

「その大部分は、<自然と人間の闘い>で使われる。虫や雑草やネズミ類など—近代人が俗に言う<邪魔もの>をやっつけるために、一九四五年前後から塩基性の化学薬品が二百あまりもつくり出され、何百何千の勝手な名前をつけて売り出されている。」 18P

「<殺虫剤>と人は言うが、<殺生剤>と言ったほうがふさわしい」 18P

「一度ある殺虫剤を使うと、昆虫のほうではそれに免疫のある品種を生み出す（まさにダーウィンの自然淘汰説どおり）。そこで、それを殺すためにもっと強力な殺虫剤をつくる。だが、それもつかの間、もっと毒性の強いものでなければきかなくなる。」 19P

「化学薬品スプレーもまた、核兵器とならぶ現代の重大な問題と言わなければならぬ

い。」 19P

「広大な農地に一種類だけの作物を植えるという農業形態がとられるにつれて、面倒な事態が生じてきた。まずこの農業方式は、ある種の昆虫が大発生する下地となった。単一農作物栽培は、自然そのものの力を十分に利用していない。それは、技術屋が考える農業のようなものである。」 22P

「私たちに必要なのは、動物個体群や、動物と環境についての基礎的な知識で、こういうことを知るときにこそ、<大発生や新しい浸食の爆発的な力を押さえて、均衡を推し進めることができるだろう>。／いますでにわかっていることは、少なくない。それなのに、私たちはその知識を十分利用しようとしない。大学では生態学者を養成し、政府関係者にも生態学者はいる。それなのに、滅多にかれらの言葉に耳をかそうとしない。」 24P

<防除に熱心な昆虫学者は検事、裁判官、陪審員、税査定人、税徴収者、保安官の役を一身に集め自分たちの考えを力づくで押しとおしている。> 25P・・・ニーリー・ターナー

「土壌、水、野生生物、そしてさらには人間そのものに、こうした化学薬品がどういう影響を与えのるか、ほとんど調べもしないで、化学薬品を使わせたのだった。」 26P

「どんなにおそろしいことになるのか、危険に目覚めている人の数は本当に少ない。そしていまは専門分化の時代だ。みんな自分の狭い専門の枠ばかりに首をつっこんで、全体がどうなるのか気がつかない。」 26P

<負担は耐えなければならぬとすれば、私たちには知る権利がある。> 27P・・・ジャン・ロスタン・・・何を耐えるのか、なぜ耐えねばならぬのでしょうか？

3. 死の霊薬

さまざまな汚染化学物質を示しています。

「何か動物実験をしようとしても、化学薬品の汚染をまぬかれた動物をさがし出すことはむずかしい。」 28P・・・反原子力で活動していた高木さんが、元々原子力関係の仕事をしていて、放射能に汚染されていない物質を探し出すことはむずかしい、というところから、ぞっとして反原子力に転じていったことにも通じることです。

4. 地表の水、地底の海

生命の源の水というところから汚染されていていっている状況を示しています。

<そもそもはじめからそれが何か、さっぱりわからない。人間にどういう影響をあたえるのか。わかるはずがない。> 60P・・・ロルフ・イライアスンの合成化学物質の危うさへのコメント

「工場から排出されるさまざまな化合物が空気、水、日光にふれて、新しい化合物を生み出す。別に化学者の手をかりるまでもない。汚染処理池そのものが実験室となって、新しい物質を、—それにふれる植物を全滅させるおそろしい薬品をつくり出していたのだった。」 65P

「ときにはつまらない問題を解決しようとして、はるかにむずかしい問題をひき起こしてしまう。」 73P・・・害虫でもないものをうるさいからと殺虫剤を散布することなど。

5. 土壌の世界

土壌の汚染問題。

<どのようにおそろしい作用があるかよくわかっていない道具>をもてあそぶおそろしさ数えあげて、かれらは言う<人間のほうでちょっとした間違いをしたために、実り豊かな土壌がだいなしになり、節足動物がこの大地をのつとることになるかもしれない>。」86P
・・・「かれら」とは 1960 年土壌生態学の会議にシラキュース大学に集まった専門家たち。

6. みどりの地表

植物の大切さやその自然の関係の均衡を示し、それを破壊することのおそろしさを示してくれています。「雑草と土壌との関係」で必ずしも「雑草」とは言えないことや、また合成化学物資を使わない、選択性スプレー（102P）などの方法や「害虫」を駆除するために他の植物を植える方法（108P）もあることを書いています。

「植物は、錯綜した生命の網の目の一つで、草木と土、草木と動物のあいだには、それぞれ切っても切りはなせないつながりがある。もちろん私たち人間が、この世界をふみにじらなければならないようなことはある。だけど、よく考えたうえで、手を下さなければ・・・。忘れたころ、思わぬところで、いつどういう禍いをもたらさないともかぎらない。」87P・・・
関係論的な網の目という廣松さんの的なとらえ方

セージュブッシュというヨモギ属の自生するところを変えようとして、他の植物を枯らし、生態系を破壊したことで、「人間が何かしようとして企てる場合、歴史や風土をどんなに深く考えなければならないものか、これはその一つのいい例と言っていい。」88P

7. 何のための大破壊？

昆虫を「害虫」（時には害などない、ほとんどない、他の方法でやれる場合も）として駆除するための合成化学物質の散布していくことへの批判。

「自然を征服するのだ、としゃにむに進んできた私たち人間、進んできたあとをふりかえってみれば、見るも無残な破壊のあとばかり、自分たちが住んでいるこの大地をこわしているだけではない。私たちの仲間一いっしょに暮らしているほかの生命にも、破壊の鉾先を向けてきたる」116P

「私たち現代の世界観では、スプレー・ガンを手にした人間は絶対なのだ。」116P・・・
地球を破壊する絶対君主

8. そして、鳥は鳴かず

殺虫剤・除草剤の鳥たちへの影響。

<昆虫の最大の敵は、捕食性の昆虫や鳥、小哺乳類などである。しかし、DDTは自然自身の番人や警官までも何もかもみな殺しにしてしまう。・・・進歩という名のもとに私たちは、悪魔のように昆虫を駆除しながら、結局自分たち自身その犠牲になろうとしているのではないのか。ただその場かぎりのことを考えるから、あとで虫たちがまた出てきたときには手のほどこしようもない。>152P・・・オーウェン・J・グロムからの引用。

「化学薬品スプレーという、猫も杓子もとびつくはやりの方法の行きつく先は、AもB

もだめ、化学薬品には、こういう皮肉な結果がつきまとう。」 154P

「健全な植物、動物社会が成り立つ鍵は、＜多様性の維持＞ということなのだ。」 158P

9. 死の川／10. 空からの一斉爆撃

9は合成化学物質散布が川、とりわけそこに住む魚にどういう影響をあたえるか、10は鳥やその他の動物への影響について、書いています。

11. ボルジア家の夢をこえて

いよいよひとに対する影響に入ります。めちゃくちゃな散布でひとにもはっきりした影響が現れていることを書いています。

ひとつの薬品だけではなく、複数の散布で、複合することによっての影響 240P

「勝手気儘に食物に毒をふりかけておいて、あとで毒があるかどうか検査をする。」 242P

12. 人間の代価

ひとに対する影響の総体的展開です。

＜私たちはみなたえざる恐怖にとりつかれている。そのうち何ものかによって環境がひどく破壊され、人間はかつて滅んだ恐竜と同じ運命をたどるのではないのか。そしてもつと困ることは、最初の影響があらわれる二十年まえ、あるいはそれ以前にすでに私たちの運命が定められているかもしれないのだ。＞245P・・・デイヴィット・プライスからの引用。

＜明らかな徴候のある病気にふつう人間はあわてふためく。だが、人間の最大の敵は姿をあらわさずじわじわとしのびよってくる。＞246P・・・ルネ・デュポスからの引用。

「私たち人間のからだの内部の世界にも、生態学と呼ばれるべきものがある。」 24&P

「人間のからだの神秘にみちた動きに少しでも目を向けてみれば、原因と結果が単純につながっていて、原因から結果へとたどれることは滅多にないのがわかる。」 247P・・・そもそも生態学は因果論的世界観を超えるところから出てきている。

13. 狭き窓より

からだの中の微視的な均衡バランスとその破壊について書いています。

＜生命の世界は精巧でもろくとも、信じられないくらい長いあいだ続いてきた。山よりも耐久力がある。そのわけは、代々の＜遺伝情報＞が信じられないくらいの正確さで世代から世代へと伝わっていくからなのだ。＞（引用）しかし「＜信じられないくらいの正確さ＞が放射線や化学薬品のために狂いだしたのだ。」 273P

14. 四人にひとり

合成化学物質による癌の発生の問題を示しています。

「さんざんな目にあいながらも、失われたエネルギーをとりかえようと、生き残った細胞は醗酵をますますさかんに行っては、補整しはじめる。ダーウィンの言う闘争と同じで、適応力のあるものが生き残っていく。そして最後に醗酵だけの力で呼吸と同じエネルギーを生み出すようになる。正常な細胞が癌細胞に変わってたといわれるのは、このときの

だ。」 296P

「ほとんどの伝染病が押さえられ、なかには事実上姿を消してしまった病気もある。このかがやかしい勝利がおさめられたのは、予防と治療という二つのことがあったからだ。」 308P とあり、なのに「癌の原因となるものを野ばなしにしておきながら、癌の薬を見つげようと大がかりな対策をひろげては望みを託し、治療の研究に莫大な費用をかけるばかりで、予防という絶好の機会は捨ててかえりみない」 310P

15. 自然は逆襲する

生物によるバランスとその破壊をとりあげています。

「昆虫は昆虫で人間の化学薬品による攻撃を出し抜く方法をあみ出しているのだ。」 312P

「化学薬品は、環境そのものに特有な防禦力、つまりさまざまな種のあいだにバランスを保っている防禦力を弱める、この防禦の壁に穴をあけるたびに、おびたしい虫の群れが溢れ出るということである。」 313P

「人間でなくて、自然そのものの行うコントロールこそ、害虫防除に本当に効果があるということ。害虫の個体群は、生態学者のいう環境抵抗によってチェックされているが、これこそが生命がこの地上に誕生してから、変わることなく行われてきたいとなみといえよう。」 314P

「生物学的コントロールの分野で活躍している研究者は、合衆国の応用昆虫学者のわずか二パーセントにすぎない。裏がえせば、九八パーセントは、たいいてい化学的殺虫剤研究にたずさわっているのだ。／どうしてまた、こんなことになっているのか。化学工業の大会社が金をつぎこむ。殺虫剤研究の資金を出すからだ。」 331P

「私たちは、世界観をかえなければならない。人間がいちばん偉い、という態度を捨て去るべきだ。自然環境そのもののなかに、生物の個体数を制限する道があり手段がある場合が多いことを知らねばならない。そしてそれは人間が手を下すよりもはるかにむだなく行われている。」 335P

16. 迫り来る雪崩

化学物質が自然のバランスを破壊していくことを細かく展開してくれています。

「ダーウィンは自然淘汰ということを説いたが、この説を何よりも如実に例証するのはまさに抵抗というメカニズムだろう。・・・引用中略・・・化学薬品の攻撃をうけて生き残るのは<タフな>昆虫だけで、殺虫剤スプレーは、弱者を一掃してしまう。生き残るのは、人間の攻撃をかかわすことのできる性質を先天的にもっている昆虫だけで、やがて新しい世代を生むが、かれらはただ相続ということによって、親がもっている<タフな>性質をすべてそなえている。だから害虫を駆除しようと大量に化学薬品をまけば、悪い結果になるとしか予想できない。強者と弱者がまじりあって個体群を形成していたかわりに、何世代かたつうちには、頑強で抵抗性のあるものばかりになってしまうであろう。」 349P

<化学コントロールではなく、生物学的コントロールこそ、とるべき道であろう。> 353P・・・ブリーイエの引用

17. べつの道

前章で書かれていた、生物学的コントロールの具体的展開です。外来種の「害虫」の被害が広がっていったとき、もともといた地域の捕食生物を持ってくるなどの方法です。

「捕食者と被食者は、それぞれ独立して生存しているのではなく、生命の大きないとなみの一部なのだ。したがって、私たちはたえず生のいとなみ全体を考えなければならない。」

375P

<捕食者や寄生虫をつれてくるよりも、樹木の<自然の仲間>をたくさん育てたほうが効果がある。>377P・・・ハインツ・ルッペルホーフェン

「私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない—この考えから出発する新しい、夢豊かな、創造的な努力には、<自分たちの扱っている相手は、生命あるものなのだ>という認識が終始光りかがやいている。」381P

最後のしめくくりの文です。長くなりますが印象的な文なので、書き記します。

「人におくれをとるものかと、やたらに、毒薬をふりまいたあげく、現代人は根源的なものに思いをいたすことができなくなってしまった。こん棒をやたらとふりまわした洞窟時代の人間にくらべて少しも進歩せず、近代人は化学薬品を雨あられと生命あるものにあびせかけた。精密でもろい生命も、また奇跡的に少しのことではへこたれず、もりかえしてきて、思いもよらぬ逆襲を試みる。生命にひそむ、この不思議な力など、化学薬品をふりまく人間は考えてもみない。<高きに心向けることなく自己満足におちいり>、巨大な自然の力にへりくだることなく、ただ自然をもてあそんでいる。／<自然の征服>—これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のネアンデルタール時代にできた言葉だ。自然は、人間の生活に役立つために存在する、などと思いあがっていたのだ。応用昆虫学者のものの考え方ややり方を見ると、まるで科学の石器時代を思わせる。およそ、学問とも呼べないような単純な科学の手中に最新の武器があるとは、何とそらおそろしい災難であろうか。おそろしい武器を考え出してはその鋒先を昆虫に向けていたが、それは、ほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ。」

381P

解説は筑波常治さんです。

この本は最初は『生と死の妙薬』という題名で翻訳されたこと。この解説者は「ものみな死に絶えし春」という題名がこの本の内容を示しているのではと提起しています。

そして、「極言すると二十世紀後半の科学技術史上、とくに注目されてしかるべき業績のひとつであろう。」とこの本を賞賛しています。

「自然界のなかの存在としてみたとき、有益だの有害だのという区別は無意味である。」と書いています。人間中心主義への批判です。386P「害虫」というとらえ方自体から問題になります。

「時代とともに、人間は家畜・作物の改良をすすめた。ということは、不健康の度合をひどくさせたのである。当然ながらそれらの生活能力は、低落の一途をたどった。／畸型にして虚弱なこれらの種族は、野生の動植物群と対等に木洋装することなどできない。したがってそれらを育てるには、人間の手による「保護」が不可欠になる。」そして、科学に

よる介入が進み、「害虫」もより繁殖する。「そこでそれらを排除するため、人間の介入が
いっそうエスカレートせざるをえない。農業の発達とは、とりもなおさずこのイタチごっ
このくりかえしであったことになる。」 289-390P

最後に「カーソン女史が本書を執筆した当時には（原書の出版は 1962 年・・・引用者）、
前記のような対策がまだ実現の望みのあるものと期待されていた。そのときから十余年の
歳月は、事態のいっそうの困難をあきらかにしてきている。たんなる気休めでない。「解決
策」は、以前暗中模索のさなかにある。」 394P

この文の執筆 1972 年からさらに 30 年、原発事故がおき、花粉症を「発症」したひとの
割合がふえ、薬害やアレルギーに悩むひとが増えています。一体科学とは何なのか、根底
的にあらためて考えざるを得ないときに来ています。

（引用部分一部記号を変えています。<>は基本著者による引用部分、斜体文字はわたし
の補足的コメント）

エコロジー関係の問題は、ときには「障害者」の存在を否定する論理につながるおそれ
があります。また、この本のなかでたびたび引用されているダーウィンの理論に対するこ
ともコメントが必要になってくるのですが、それについてはまた別稿で書いてみます。

『反障害原論』への補説的断章（9）

「原発事故による遺伝子変異」をめぐる言説の危うさ

－反公害運動と反障害運動の「衝突」の解決を探る－

「公害」ということで、「障害者が生まれる」ということが繰り返し語られてきました。
それに対して「障害者運動」サイドから、そのような言い方はわたしたちの存在を否定す
ることにつながるという批判がなされてきました。

今、原発事故ということでも、「障害者が生まれる」という事が語られ、遺伝子変異によ
る癌の発生率が上がるということが言われています。

「障害者」をめぐる遺伝の言説は交通事故などによる中途「障害者」以外は少なからず
出てきます。むしろ、「障害者」の存在を否定的にとらえる言説として働いてきたとも言い
得ることではないかと思えます。

わたしは「障害の否定性」の否定をずっと課題にしてきました。で、遺伝子をめぐる
言説はつねに、否定性を前提にしたところで出てくる事として、批判してきました。

さて、遺伝子という場合、いくらかの混乱が起きています。一般に遺伝子というと、生
殖遺伝子というイメージがあり、生殖遺伝子の変異による「障害者が生まれる」という話
になります。ところがもうひとつの体細胞遺伝子の遺伝子変異による癌の発生という問題
もあるのです。後者は、とりたてて遺伝子ということばを使わずに、放射線を浴びること
によって、癌の発生率があがるというだけですむ話です。そのことを遺伝子の話をするこ

とによって混乱を起こしていると言い得ます。

そもそも遺伝子のメカニズムはほとんど分からぬままに、遺伝子決定論のようなことにとらわれているとも言い得ます。(註1)

ある種の遺伝子変異が「発病」を引き起こす高い確率(註2)がある例ばかりが強調されます。具体的「病」名や「障害」名あげること自体を躊躇するのですが、寝た子を起こすな式の差別論的な立場にとらわれないというところで、あえて名を出しておきます。よくあげられるのは「ハンチントン病」です。で、あるDNAの部位の変異が起きると、80%くらいの確率で、その「病気が発症」し、しかもその「病気の発症」は性格的に攻撃性が増すなど、「誰がどう見ても悪いことだ」というような話として出てきます。

ここで、まず第一に問題にするのは、そもそも遺伝子を問題にするひとたちは因果論的世界観にとらわれているということです。これは100%の確率ならば(そのようなことはありえるのでしょうか?)、仮に(あくまで仮にです)、因果論的なことが使えるということは言えます。これは、物理学の世界においても、量子力学的なところにパラダイム転換がなされた後も、ニュートン力学的なところはマクロなところで使えないわけではないということと同じようなことです。ですが、そもそも遺伝子変異がおきたとしても必ずしも発症しないというところにおいては、遺伝子は関数的連関の一つの項に過ぎないとされることです。その項が確率関数的なところで大きな位置を占めることがあるとしても、です。むしろ遺伝子変異ということとは「障害者」と規定されないひとでも、かなりの確率で起きていて、その変異が複合するとき、そしていろんな「条件」の中で、初めて、「病気」なり「障害」となって現れるという方が一般的です。遺伝子変異ということが「障害」とイコールであれば、「障害者」はマイノリティではなくなるという研究も出されているようです。

第二に、「性格が変異」するということが、どのようなところから起きてくるのか、必ず起きてくるのかという問題があります。わたしはこの競争社会、差別社会でこそ、かなりの確率で起きてくるということがあるのではという仮説を立ててみます。これも関数の中の項の問題です。

第三に、「誰がどう見ても悪いことだ」ということの問題です。たとえば、人権先進国・地域といわれるヨーロッパにおいて、チェルノブイリ事故の後で、妊娠していたひとが墮胎したということがかなり起きていますし、安楽死や脳死臓器移植や人工内耳の手術も広がりを見せています。むしろ、出生前診断というようなこともかなり進んでいます。「誰がどう見ても悪いことだ」という意識がかなりの広がりを見せているようです。しかし、そもそも、「誰がどう見ても悪いことだ」ということがありえるのでしょうか?

致死性の「病気」や「障害」において、「死ということは紛れもなく否定的なこと」(註3)ということの中で、その分野での遺伝子研究は容認される風潮があり、それを突破口に遺伝子研究が進められている現実があります。(註4)

わたしはそれはそもそも遺伝子操作が何をもたらすのかということブラックボックスの中に入れたままに進められていることで、もし、それらのこともすべて含めて考えたとき、致死性の「病気」や「障害」をもったひとは必ず遺伝子操作を歓迎するとは言い得ないと思っています。

第四に、そもそも「攻撃性」ということも、ある種の攻撃性ということ言えば、例え

ば、反差別の立場での攻撃性は全否定すべきことではありません。そういう意味で、「誰がどう見ても悪いことだ」ということの相対化も必要です。

さて、そもそも被害の強調ということが差別を生み出す、差別の再生産を生み出すという問題があります。たとえば、「フクシマ」ということばが独自に動き出し、たとえばサッカーの試合で、日本選手へのブーイングの際に、このことばが使われたというような話も出ています。

原発はそもそも原爆の技術からきているのですが、その原爆ヒロシマ・ナガサキにおいてもにおいても、差別ということを回避するために、被爆者であることを隠すということがありました。原発の態勢ということも、この被害の隠蔽ということの中で作られたという側面もあります。

これは一種の「寝た子を起こすな」という論理なのです。反差別運動は、「寝た子を起こすな」ということを批判してきました。そういう被害は被害ということできちんとつきださねばなりません。しかし、それを突き出すと現実的な差別を受けてしまう、そのあたりのジレンマがあります。

そのあたりは「病気」の問題と通じることがあります。「病気」はとりあえず、直すことです。しかし、慢性化する中では、「病気と友達になる」というようなところで新しいホメオタシスを形成していくのです。そのホメオタシスということが形成されていくことの中で、どういう生きるための条件を形成していくのか、生きる障害を取り除いていくのかをたてていかななくてはなりません。そこでは医学モデル的な「障害」の除去ではないのです。そのあたりが「社会モデル」としての障害の除去の問題だと押さえ得ます。

もうひとつ書いておかないといけないことは、「障害者が生まれる」というような発言をしているひとは、個人モデル的なところで、「他人事」のようなこととして話しているのです。しかし、今日、公害ということは、放射線被害ということは、個人の問題ではなくなっています。ヒトという種総体に及んでいるのです。

環境ホルモン 二酸化炭素温暖化 アトピー エイズ 花粉症という現代広がっていることは、誰でも潜在的な被害者になっています。

そもそも、個体と環境の二元論、二項対立的とらえ方が、問題をとらえにくくしてしまっているのです。個体に起きるとされるがんや遺伝子変異ということに焦点をあててきていました。それらのことがはっきりわかりやすい現象ということで、例示されてきました。そこには死や病気の因果論的な因として、遺伝子やがん細胞ということを取りあげできたのです。ですが、むしろ関係総体の中での生きること危うくなってきている、その事の「個別現象」としての様々な変異が起きているのです。因果論的なところで遺伝子を強調するのは、その問題を個体の問題・他人事の論理に陥って行くのです。「障害者になる可能性」などという言い方は、すでに合成化学物質や放射線被害の蓄積ですべてのひとが（少なくとも潜在的に）「障害者」になっている現実がとらえられていないのです。

さて、障害の個人モデルと医学・生物学モデルということは同一化されてきたのですが、公害といわれることを押さえれば、個人モデル等と言うことは崩壊していきます。

医学・生物学と言われること自体も、生態学の出現などの中で、関係論的転換がなされています。だから、医学・生物学モデルという言い方は、旧態依然の生物学や、医学に基づくモデルということなのです。

そのことも含めて、反公害運動と反障害運動の「衝突」ではなく、連帯していく道筋が出て来ると思います。改めてそのことを考えて行きたいと思っています。

註)

1 ドーキンスの「利己的な遺伝子」なる話はその極としてあると言い得ます。

2 確率や数ということの危うさの問題もあります。被害を受けたひとは、何分の一、何十分の一であっても、当人にとっては 100 パーセントなのです。癌の発生率などは何パーセントという言い方ですが、発症したひとは、パーセントは関係ないのです。

3 わたしは死ということが必ず否定的なこととは思っていません。いろいろ語られてきた事ですが、生が永遠に続くようなことは時として拷問のようなこととしてあるのではないのでしょうか？

4 死とか「重度」とかいうことで、否定性が強調されるのですが、それらのひとは、むしろ開き直ったり、悟りを開くようなこともあります。「軽度」とかマージナルな「障害者」の方がむしろ「障害」がなければ」という思いにとらわれる傾向もあります。

お知らせ

◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。印字でうまく出ないとき、読み込めないときはメールで連絡ください。また縦2段組みで印刷したのものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 31 号」アップ(11/12/27)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

(編集後記)

◆もう少し、早く出せる予定だったのですが、東京に戻れなくなって、すっかり遅くなりました。いろんな文案が浮かんでいたのですが、もやもやとしたまま、まとめきれないでいました。

◆巻頭言は、もやもやとしていたものを文にしました。実は、これは一番最近に読んだ本(『反資本主義宣言』)の読書メモとわたしの中ではセットになっている文なのですが、あくまで「わたしの中で」しかないの、とりあえず別に出します。

◆読書メモ、エコロジーと原発震災関係の本への集中期間がずーっと続いています。今回は「社会モデル」関係の文書がインターネットで掲載されているのを見つけ出して、それへのコメントを挟みました。読書メモの冒頭にも書きましたが、もう少し読書は進んでいます。長くなると読みづらくなるという提起を受けていくつかを次回に回しました。

◆「断章」は、ずっと課題にしている、何回か文にしてきたことを再度まとめようとした試論です。遺伝子工学をやってきたひとが、遺伝子決定論を批判している書などもあります。そもそも遺伝子という概念自体が要素論的・因果論的な世界観から来ていることで、今一度認識論的なところから掘り下げた論考を生みだして行きたい、そのあたりがモリスらの障害学批判への応答にもつながっていくのではと思っています。

◆次回は少し早めにとっています。タイミングを外すと、1ヶ月近く遅れるので、どうなるか分からないのですが、思いだけはいろいろ動いているのでなんとか、出していきたいと思っています。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム(基本的考え方の枠組み)の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>